

山縣公のおもかけ 目次

- 一 先帝御不例・先帝崩御の夜
先帝奉斎・公の祭文・明治神宮と公の信念
- 二 年末年始の御礼・拝謁の心得・諒問後の謡曲・有不爲所・勅命に対する弱者・責任・忠臣たるを欲せず
- 三 私の第一印象・解し難い或物・心意の活動力・矛盾の性格・良心の作用・癩癩・寺内伯の叱言と公の癩癩・神経質と自制
- 四 智能の人・人を適所に用ふ
「展ひぬる」と「展ひぬる」・私の経験・賢愚・公私の区別・公の演説と座談・聴聞上手
- 五 条理の貫徹・攻究心熾烈・独特の研究法
- 六 先帝の詔勅・大嘗会の夜・東宮の御渡欧・陛下の御閲兵・御下賜・蜜柑の献上・質素の奨励・御諫言一手引受所・華族制度・人物と上流の教育・霊山参拝・御濠の松・警衛と覚悟・化け物に出会はぬ談
- 七 健体鍊膽の四字、天稟、鍛錬、撰生・三越の塔・公の頭・公の顔貌・宗教観・家庭
- 八 和歌・庭園・謡曲・茶の湯・刀剣書画骨董・自然の風光・飲食・音曲・田畠・詩歌の友・文芸的思潮・和歌の譲渡・森寛斎の画・公の書と書翰
- 九 公の一日・質素・邸宅の話・住家・居間と客室・財産・公と株券
- 一〇 市中見物・麦飯・観劇・誕辰の宴・日本外史と歌集・二つの乱れ籠・青赤の鉛筆・迅速を喜ぶ・署名と名宛・絵画・時計と時間・旦那様・行燈袴・紋所・癖
- 一一 始めて宮闕を拝す・用意周到・長岡の逆襲・維新当時の外国干渉・松陰先生・高杉東行・大西郷・廃藩置県の密議・伊藤公・藤公の死・小西郷と大山公・日露戦争挿話
- 一二 欧米旅行・公事に対する熱心・日米関係・政治家の活眼・ビスマーク演説集・人口都市集中の研究・思潮の講究・外交問題・グリー氏の頌詞・忿懣の余滴・当局醒めたりや
- 一三 公の後継者と部下・乃木大将の自刃・桂公の内大臣・桂公

の秘策と公の反対・桂公の元老押込策・伊藤公の日露協定策と日英同盟・第三次桂内閣の出生と公の決意・大隈内閣、寺内内閣、原内閣・元老会議・皇室中心主義

一四 辞表奉呈・優詔・聖上の御見舞・最後の病氣と家人婢僕・死の予知・まだ死なぬ・病室の臭ひ・絶筆・両元老両雄の永別・嬉しき一事

附 山縣元帥追憶百話

(前内閣総理大臣) 高橋是清、(陸軍大将) 田中義一、(樞密院議長) 清浦奎吾、(陸軍中将) 長岡外史、(前司法大臣) 尾崎行雄、(日本銀行副総裁) 木村清四郎、(前農商務大臣) 仲小路廉、(内大臣) 平田東助、(前陸軍大臣) 大島健一、(東京市長) 後藤新平、(台湾総督) 田健治郎、(朝鮮総督府政務総監) 有吉忠一、(樞密顧問官) 金子堅太郎、平山成信、有松英義、曾我祐準、石黒忠徳、古市公威、細川潤次郎、中村雄次郎、(樞密院書記官) 村上恭一、(宮中顧問官) 井上通泰、(皇后宮大夫) 大森鍾一、(衆議院議員) 下岡忠治、横田千之助、工藤十三雄、松本剛吉、(貴族院議員) 船越光之丞、上山満之進、児玉秀雄、徳富猪一郎、二荒芳徳、

稲田周之助、(前元帥副官) 古荘幹郎、林弥三吉、吉江協中、米村靖雄、渡邊錠太郎、(陸軍々医総監) 平井政道、(陸軍軍医監) 賀古鶴所、(陸軍軍医) 高嶋張輔、(京都帝国大学教授) 千賀鶴太郎、(東京府第六中学校長) 阿部宗孝、(実業家) 大倉喜八郎、瀧澤栄一、野々村金五郎、高橋義雄、伊東米治郎。

■本書を並製にする理由は次の通りです。
①本書は山縣有朋についての最も読みやすい入門書でもあり、より多くのお方に知って頂くため、今回は並製にしてそれだけ廉価で販売したいからです。
②今夏予定「防長回天史」普及版の遺本の参考にするためです。したがってB6判の本書をA5判に拡大致します。
■「申込ハガキ」にある通り、「三点セット」の場合、入手困難な本書がわずか三千円です。この機会にぜひお求め下さい。

■体裁 A5判並製箱入五〇〇頁
■定価 六千円(税・〒380円)
■予約特価 五千円(税・〒込)
■特価締切 平成二十二年三月十日厳守
■発売 平成二十二年四月十日予定
▼書店不卸 ▼分割払可 ▼返本OK
●申込ハガキにあるセット特価をご利用下さい。
山口県周南市銀座2-13
☎0834②二九五 マツノ書店

明治期人物誌第二弾



側近、関係者の語る人間・山縣有朋!

山縣公のおもかけ

附追憶百話

入江貫一 著

マツノ書店

智能の人

徳富蘇峰氏は曾て伊藤公は豊臣秀吉に又山縣公は徳川家康に似てゐるといふ事を、何かの論文に書いた事があるのみならず、公の晩年公に向つて親しく家康に似てゐると云つた事がある。公は内心此の事を嫌つて、自分は家康の如き智者ではないと云つて居られた。

公が家康に似てゐるか否かは別として、公は確かに智者であつた、天稟の智能は普通人の群を抜いてゐた事は争はれぬ。たゞ智慧に委せて心に悪事と知つて之を行ふ事は其の性格が許さなかつたのである、換言すれば廉恥の心が智慧の奔逸を許さなかつたと私は思ふ。さればこそ公は常に智者を好愛し、公が一生を通じて重用した人物も悉く、智能に勝れた人々であつた、決して普通人と同列以下にある愚物を拔擢して、重要な地位

四 智能の人・人を適所に用ふ・「展びる人」と「展びぬ人」・私
の経験・賢愚・公私の區別・公の演説と坐談・聴聞上手

七 健體錬膽の四字、天稟、鍛錬、攝生・三越の塔・公の頭・
公の顔貌・宗教觀・家庭

公は十九歳の時京都に遊んで天下の形勢を視察し、傍ら志士と交つたのであるが、當時薩州藩邸に志士數人會同した時其の中で牛耳を採れる長藩の久坂玄瑞が、今日は各人の志望を述べて見やうと曰ひ出した、席に在る豪傑達は各々懐く所の大志を述べて、各人の感懐火の如くであつた。やがて公の順番となつた時自分の志望は健體錬膽の四字にある、願はくば之を以て君國に奉仕せんと述べられた。久坂玄瑞は之を聞き、大に其の志を可とし推賞措かなかつたといふ。之より後兩者の交情一層の親密を加へ、遂に玄瑞の勤めに依り、公は吉田松陰の門に遊ぶ様になつた。故に公は久坂、高杉、伊藤(公)等より後に松陰の門に入つたのである。

健體錬膽は公の幼時よりの志願であると共に、一生を通じて確守せられた信条であつた。さればこそ一二持病があつたに拘らず、彼の體質と長壽と元氣とを保たれた事と思ふ。

公の斯くまで長壽であつて、且つ心氣の衰へなかつたのは、天稟と鍛錬と攝生との三拍子が揃つて居たからだと思はれる。天稟丈夫な體質を持たなければ、如何に鍛錬と攝生とに力を用ひても公の様には行かない。先づ公の體格から云ふと、瘠せては居られたが身長五尺七寸に近く、日本人としては大男である、骨格は極めて太く逞しい、八十餘歳まで腰も曲らない、眼も耳も八十を越えるまでは、あまり衰へなかつた、八十を越える頃から耳は稍、遠くなり眼も霞む様になつたが、それでも新聞等の細字を除いては眼鏡を用ひないでも用を便じて居られた、齒は稍、他の機關に比べると劣つて居たかと思はれるが、兎に角自分の齒と義齒とで相當齟齬する事が出来た、内臓に付ては氣管支と腸に痼疾があつたが、其の他は普通以上に健全であつた。殊に驚く可きは心臟と腦との組織である、公はこれまで數回大患に罹られたが、心臟に付て心配したのは最後の病氣と、大正八年に肺炎に罹られた時のみで、平生に在つては脈搏の性質も非常に柔かく、

其の點では壯者の様であつたと醫者も云つて居る。

腦の組織が天的に健全で有つた事は一層驚くべき事であつた、理解力、想像力、記憶力の人並勝れて居た事は申すまでもないが、餘程烈しく頭腦をつかつても餘り疲勞を感ぜられなかつた。朝から晩まで數人の客に應接し、其の客が各方面に亙つて、談話の内容も元より政治、外交、軍事、教育、財政等有らゆる方面の随分複雑した事のみであるが、夕景に至るまであまり疲勞を感ぜられないのみならず、其の來客の絶へ間絶へ間

健體錬膽の四字

子爵 後藤 新平氏

○純忠公正

山縣公は實に非凡な人であつた彼のやうな人はめつたに生れて來るものではない。腦の組織なども解剖してみたら餘程常人と異つて居たに相違ないと思ふね。

第一彼の人の忠誠といふ事からして普通の人の忠誠とは違つて居たよ。それは何の元老でも其の他の功臣でも忠誠には違くないさ、由來日本には忠誠の人に乏しくはないが、彼の人計りの忠誠は一段違つて居たよ、何と評したらよいか、純粹、無垢、そこへ行くと自己の立場なんぞは少しも念頭に無いのだからね。

それに知らない人から見ると如何にも嚴格格勤に過ぎて間口が狭いやうだけれど、あれで中々奥の方は廣かつたね。自分が嫌いな人の云ふ事でもちやんとそれを懐にしまつて居られたよ。そして何かある時、君斯ういう事もあるせなご、云つてそれを出して、見せられる事がある。人に依つて言を捨てすといふのかね、吾輩なども随分叱られもし誨へられたものだが、道理が立つて正當な事なら何でも善く受け入れられたよ、自分では何も知らないよと云つて居られたが、人の智能を集めて適當に處理判斷して行く所などは實に優いものだつたね。

兎に角、せめてもう二三年も生きて居られたら、どうなつたか。どういふ風に此の日本の現状を持つて行かうとせられたか。

○進歩的思想

山縣公に對する世間の批評は一般に保守派の頭目官僚の大御所といふ風に解して居るが事實は左様でなく憲法政治の運用に就いては非常に苦心をしたのだ官僚といふ一種の関を超越した民權思想——非常に進歩的な思想の所有者であつて元來明治維新の宏謀に參畫した先輩は濃淡厚薄の差こそあれ擧げて悉く然りといつて可なりだ大隈侯も亦然りで、此頃の政黨者流に比すると思想的には風格を異にし却て達觀進取の氣魄に富んで居つた屢、大隈侯を巾着の緋りのないやうなことを批評をしたものもあるがそれは緋口を見る眼のない徒輩の言で伊藤、山縣といふ元勳に親接して見ると、普通の所謂官僚者流とは大分調子が違つて居つた、所で山縣公の政治的方面に關する功績であるが先づ第一に内務大臣時代に努力した内地行政の整理である當時に於いて二流の人物であつたが青木周藏子が旺に伊藤、山縣といふ連中に獨逸がナポレオン一世に蹂躪された荒廢の國家を復興せしむるに慘憺たる苦心を費した事蹟を説いたものだ此の青木といふ人は當時の



『山県公のおもかげ』を推す

東京大学名誉教授 伊藤 隆

現在手に入れる事が極めて困難になっている本書の復刻は大変に嬉しい事である。

山県有朋は近代日本のファウンディング・ファーザーズの一人で、近代日本を理解しようとする時に、決して抜かす事が出来ない人物である。しかし、日本陸軍創設者の一人で、「長州陸軍」閥の総帥として、生存中から批判者も少なくなかったが、特に戦後ハーバード・ローマンなどの、日本の侵略的軍国主義の権化という評価が災いして、とかく冷たい視線を浴びせられる事が多かった。

岡義武『山県有朋』（岩波新書）がそうした評価に対して冷静な山県像を提示したにも拘わらず、私は歴史家をはじめ、山県評価は依然歪んでいると思い、昨年（平成十九年の事）ハワイ大学名誉教授ジョージ・アキタ氏の傘寿を祝い『近代日本と山県有朋』を編纂刊行し（吉川弘文館）、その中で「近代日本における山県有朋の位置付け」と題して、私見を発表した。その際にも本書を多く活用した。ちなみに昨年は、アキタ氏を含み私を代表者とする山県有朋関係文書編纂委員会編『山県有朋関係文書』全三巻を完結させた（尚友倶楽部・山川出版社）。

山県逝去直後に、明治四十一年から枢密院議長秘書官等として十四年間近侍した入江貫一が、山県の遺事逸話を、友人の阿部寿準から、伊藤博文の秘書官であった古谷久綱の『藤公余影』のように書く事を勧められて、『山県公のおもかげ』という題で博文館から刊行した。それを入江は各方面に送付して、百人の人に山県についての思い出・追悼文を寄せて欲しいと依頼した。それに対して、送られた文章や入江に対する談話が百集まらぬ内に一周忌が近づいたので、四十八人からの談話の集まったところで、「山県元帥追憶百話」と題して、前に刊行したものに追加して偕行社編纂部から刊行したのが（何故か刊行されたのは昭和五年になっている）今回復刻されるものである。

入江も談話者も述べているが、事機密に関するものは含まれていない。しかし明治大正期の指導者山県の姿は実に様々な角度から語られている。入江も述べているように、最も活動的な時代の山県を語るべき人は、山県よりも若年の人さえも既にこの世を去り、その時代の山県については、山県やその親近者からの伝聞しかない。従って多くは晩年の山県が語られている。

山県は機密に互る事を残さなかった訳ではない。二上兵治家に残された大正期に山県が政治・外交上の自己の行動を詳しく語った記録（実は元来入江貫一が作成に関与し、遺したもので、枢密院が廃止された時に、二上の遺族に渡されたものと思われる）を、私は遺族から国会図書館憲政資料室に寄贈して頂き、『史学雑誌』に連載した後には、『大正初期山県有朋談話筆記』と題して、昭和五十六年に山川出版社から刊行した。実はその後には欠落部分が多上家から寄贈されたが、増補を活性化できないでいる。山県の著名な「大正政変記」もこれの前に連なるものと思われる。山県が入江を相手に比較的最近の事柄を詳しく語り、入江が浄書して、更に山県の字で訂正増補の筆が入っているのである。

こうした内容は、入江の大正初期の政変についての記述の基礎にはなっているが、具体的な外交問題については本書では窺う事が出来ない。ただ本書で非常に興味を引かれる一つは、山県の外交問題意見についての入江をはじめ数人の記述である。入江は山県の「維新以来我国は屢々苦心を要する境遇に出会ひ、幾度か今から思ふても寒さを感じるやうな困難にも際会したが、幸にも無事に之を通過したのみならず、殆んど予期しない程の国運の進展を見るを得た、其の間に処し先輩等の苦心は実に容易なものではなかった」、日本の大国化に伴いよいよ複雑になる国際関係の中で数倍の困難に遭遇するに違いない、それを後進の人々にしっかりとやって貰いたい、という言葉を記し、最後の病中にも「対支対米の関係を憂ひて」いたと書いている。維新前後の困難の克服は「天佑と云つてもよい」もので、「今日から之を顧みれば、懸崖に立つて、千仞の溪を臨むが如き心地する、実にあぶない事であった」という山県の述懐も記されている。

その対米問題について、入江は明治末年の米国の満州鉄道国際管理提案以来、山県が将来におけるアメリカとの衝突を危惧しており、それを避けるべく苦心していたことを述べているが、金子堅太郎は「米國は将来極東に於て必ず大勢力を揮ふ時期が来るに違ひない。故に日米の關係は最も親密円満にし、少しでも衝突の起るやうな事情を作つてはならぬ」というのが、山県の強い意見であったと言ひ、日米關係が緊張している今日「公を失つたといふことは、日米のみならず延いては世界の一大不幸とせなければならぬ」とまで述べている。

山県が軍事のみならず全ての方面について慎重であり、実に研究熱心であり、その上で意見を関係者に伝

えていたという事については殆ど全ての人が指摘している。元副官の古荘幹郎の言葉を引用しておく。「閣下が常に研究を怠らず、時勢に後れぬ様に努められた事は、其の警咳に接した人の皆知る処であります。嘗て次の様な嘆声を漏らされた事があります。『自分は従来新帰朝者があれば、必ず其の話を聞くのを楽しみとしたのである、而して其の前には必ず其人の経歴を調べ、報告或は著述等に依りて、其の人の主張なり、其の調査事項なりを予め承知し、然る後其の人の話を聞くを例とした、随て短時間の話でも能く了解し且十分に質問を試み此の疑惑なきを得たのである、然るに大正八年の大患以来其の氣力頓に減退し、到底準備を為すの力なし、故に今日は話を聞いても大に興味の薄い云々』と、又以て其の平生の用意を知る事が出来る」と。

時代や状況が異なっていようと、国家の指導者のあるべき姿の一つの典型をここに見いだす事が出来よう。そうした意味からも本書が広く読まれんことを希望する次第である。



部下の見た山県有朋

萩市特別学委員 一坂太郎

「カミノリ」と呼ばれた敏腕政治家の後藤田正晴に、半世紀にもわたり仕えた元部下の佐々淳行が、その体験を基に綴った何冊かを最近上梓している。たとえば、よど号ハイジャック事件や浅間山荘事件において、その危機管理能力がいかに発揮されたかなど、昭和戦後史の裏側がいろいろと垣間見れて興味深い。それらを目にするたび、『山県公のおもかげ』という一冊を思い出す。明治の元勲山県有朋の側近だった入江貫一が著し、大正十一年九月に博文館から出ている。山県が没したのはその年二月だから、没後約半年の出版だ。(今回復刻されるのは昭和五年の増補版)

入江貫一は山県と同じく長州出身の元勲野村靖の次男である。幕末のころ戦死した、野村の兄入江九一の跡を継ぐ。山口高等学校から東京帝大法科に進み、卒業後は内務省に入って、ついで枢密院書記官・秘書官を兼ね、山県に出会う。入江の記憶では直接の部下で長州人は、四人しかいなかった。

『山県公のおもかげ』は何げなく読み始めたら面白くて、やめられなくなるような本である。史料としての価値の高さはあらためて述べるまでもない。私はリーダー論の名著だと考えている。入江は淡々というほど冷たくもなく、かといって感情に流れるわけでもなく、美辞麗句を並べるわけでもなく、実に絶妙なさじ加減で山県という上司をリアルにスケッチしてゆく。

巻頭の逸話は、枢密院の重要会議に臨席した明治天皇が、議事半ばに眠気を催すという衝撃的な場面から始まる。それに気づいた山県は自ら佩びていた軍刀で、床をコツンと叩く。天皇はハッと気づき、その後はいつものとおりの厳正な態度に戻った。天皇は枢密院開設以来二十余年間、幾十回となく臨席しているが、いまだかつてこのようなことは無かったという。ところが四日後、小田原に帰ろうとする山県は、昨夜より天皇の病が悪化していると知らされる。そしてあの時の眠気は、病気のせいだったと納得をする。十数日後、崩御。入江は「足をそろへて直立し、上体を曲め『何とも申し様の無い事だ』と云はれ、眼には涙が一ぱいたまっていた」という山県を目の当たりする。そして入江もまた「其の沈痛な音声深く私の心に響いて、私は只涙が出た」と言う。

山県の人材抜擢、育成についても、いくつかの例を使って説明されている。すぐれたリーダーに、親しく仕えることが出来た者は幸せだ。ましてその幸せな記憶が、日本を動かした歴史と大きく重なるとなれば、これを部下として記録しておきたいと願うのは当然だろう。この点、後藤田本・山県本の底辺に流れている著者の熱い思いは、共通する。保身術だけに長け、朝令暮改や責任転換は当たり前といった上司が横行する人の世では、いずれも憧れの夢物語だが、それでも忘れてはならないものが、確かにあると思う。



明治国家最大のリアリスト

日本工芸フォーラム代表取締役 佐竹義宣

いま都会人の一部に大マスコミの紙誌上で「明治のリアリズムに学べ」とか、「閉ざされた言語空間」などと江藤淳さんの口真似をする人を時々見かけます。「明治のリアリズム」云々も昭和の大衆娯楽小説家の口真似のようです。

山県有朋元帥こそが、維新政府と明治国家最大の「リアリスト」でした。山県元帥や乃木大将を巡る「閉ざされた言語空間」こそが、昭和と平成の奇怪不可思議なゆがみとひずみを生む素になったとわたしは思っています。

現在も山県有朋を憎んで見せなければ、一丁前の文化人と見られない、近代史学界の仲間内では付き合えない、とばかりに元帥を語る枕詞からして「陰険な山県は……」「猜疑心の深い山県有朋は……」と先ず一くさりし、悪の権化を既定の前提にして「半封建的軍事的天皇制絶対主義の権化」「日本軍国主義のアジア侵略の元祖」「自由民権運動、社会主義の弾圧者」「政党政治の抑圧者」「藩閥政府の陰険な黒幕」そしてそれを一まとめして「日本近代史の闇の象徴」を定番の常套句とする書籍が沢山出回っています。その種の種本は、昭和の初めから六十年代まで数十年間も猖獗を極めた、頭の中は既にコミンテルンのエージェンタ化して、肩で風を切って颯爽と闊歩した、あの著名な学者らの著作の数々です。

山県元帥には、奇兵隊軍監山縣狂介の「奇兵隊軍規七ヶ条」に始まり、意見書、建言書、上奏文、戦況報告書、総理大臣、陸相、内相、司法相時の演説や各界人への手紙、志士活動時の京都での文芸作品「葉桜日記」、北越戦争時の長岡での歌集「越の山風」などなど沢山の記録が残されていますが、調べれば調べるほど、老成沈着緻密細心の人であり、論理明晰、推断徹底の人であり、何よりも先見洞察路路整然の人であったことが判ります。

元帥の政党政治論、自由民権論、支那論、外交国防論などを見れば見る程、百二三十年後の平成日本の右往左往を見透かされ、指摘されており、何たるお人かとおそろしくなります。

それにしても今年はうれしい年でした。三月には伊藤隆教授編纂の『山県有朋と近代日本』（吉川弘文館）の出版に続き、マツノ書店・松村久さんは入江貫一著『山県公のおもかげ』を復刻されるという。徳富蘇峰先生の『公爵山縣有朋傳』（全三巻）の出版が昭和七年です。一般国民が読める山県元帥の真実を語る本格的出版本が七十七年ぶりの伊藤教授の出版であり、続いてのマツノ書店の今回の復刻ありは、偽装された日本近代史と罵詈雑言の限りを尽くされ、建国の父たちを辱めたことを許した末の因果応報がさまざまに分野で湧き出した現在、山県有朋の格好の入門ガイドブック『山県公のおもかげ』をきっかけに、面白いマンガ、楽しい小説よりも山県有朋の地方自治論、外交・国防論、政党政治論、軍事論、教育論を読もうではありませんか。山県有朋元帥はまぎれもない正真正銘の「建国の父」（欧米人はファンディング・ファザーズと言うようです）の一人ですから。

(平成二十年十一月記)